

シンガポールにおける宗教的寛容性の育成：中学校における「市民・道徳教育」の取組みに着目して

著者	金井，里弥
雑誌名	東北大学大学院教育学研究科研究年報
巻	59
号	1
ページ	401-413
発行年	2010-12
URL	http://hdl.handle.net/10097/50024

シンガポールにおける宗教的寛容性の育成

中学校における「市民・道德教育」の取組みに着目して

金井里弥

本稿は、シンガポールの中学校において、「市民・道德教育」の科目で宗教的寛容性の育成がどのように図られているのかを検証した。シンガポールでは1980年代の「宗教知識科」の失敗を契機として、1990年代以降、宗教的・人種的調和が改めて強調されてきた。学校教育においては、「宗教知識科」の廃止後に「市民・道德教育」を設け、そこにおいて、宗教的調和や宗教的寛容性の重要性を生徒に認識させることが求められている。実際に宗教的寛容性をどのように育成しているのかについて、同科目のシラバスならびに現地調査をもとに検証した結果、第一に、生徒の主体的な学びが推奨されており、さまざまな宗教に関わるディスカッションやリサーチが重視されていたこと、第二に、生徒に自身の信仰とは異なる宗教に触れる機会が提供されていたこと、そして第三に、宗教的不寛容の危険性を認識させることが求められていたことが明らかとなった。

キーワード：「市民・道德教育」、道德教育、宗教的寛容性、宗教的調和、宗教理解

1. はじめに

本稿は、シンガポールの中等学校において、宗教的寛容性の育成がどのように図られているのかを検証する。シンガポールに限らず、多宗教国家においては、異なる宗教間の寛容な姿勢が宗教的調和を保つ上で必要とされる。しかし、そうした宗教間での理解や寛容の姿勢を学校教育の場で育成しようとする時、どのようなアプローチが求められるのかが重要な課題となる。学校教育において、生徒たちの宗教的寛容性を育成するにあたり、宗教というデリケートな事柄に生徒たちをどこまで関与させることができるのか、どこまでの関与が妥当であるのかなど、様々な問題が提起される。これらの問題を踏まえ、本研究では、シンガポールの中等学校において、宗教的寛容の精神をいかにして育成しているのかを検証したい。

分析の手順としては、①シンガポールにおいて1980年代後半以降、宗教的調和がより強調されるに至った経緯を概観した上で、②宗教的調和を重要な価値項目として掲げた「国民共有価値」(Shared Value)の理念を検証し、③それに準拠する形で編成されている道德教育科目「市民・道德教育」(Civic and Moral Education, CME)のシラバスから、宗教的寛容性の育成がどのように図

られるべきとされているのかを明らかにする。そして最後に、④シンガポール現地の中等学校において実施した調査をもとに、宗教的寛容の精神の育成がどのように実践されているのかを明らかにする。

2. 宗教的調和が必要とされた背景

もともと、シンガポールは多宗教国家であることから、宗教的調和の維持は社会的安定性を確保する上で重要とされてきた。とりわけ、1980年代の「宗教知識科」の導入はシンガポールにおける宗教の取り扱いを見直す契機となった。この「宗教知識科」は1984年に中等教育段階に導入された必修の道徳科目であり、生徒は「儒教倫理」、「仏教学習」、「キリスト教知識」、「イスラム教知識」、「ヒンドゥー教学習」、「シク教学習」の6つのコースのうちいずれか一つを選択し、履修する。生徒は、自身が選択した宗教が内包する伝統的価値観を学ぶことが望ましいとされ、この点において、「宗教知識科」は、道徳教育としての位置づけを有していた。しかし一方では、この科目は宗教に関わる知識の教授を特徴とする試験科目として位置づけられた¹。知識の教授を中心として行われる道徳教育という性格は、「宗教知識科」において宗教を取り扱うということへの政府の慎重な姿勢を表していた。同科目における礼拝などの宗教的实践は禁止され、布教活動が行われないよう学校側に徹底した監督を求めている²。1980年代当時に「宗教知識科」を担当していた教員および、同科目を生徒として履修していた人々へのインタビュー調査においても、「宗教知識科」が「英語や数学と変わらないアカデミックな」性格であったという見解が共通して見られた³。「宗教知識科」は学校現場において道徳教育ではなく宗教に関する事実を知識として教えるアカデミックな科目として扱われていた。

しかし、「宗教知識科」がアカデミックな科目として扱われていながら、その導入後、シンガポール社会において宗教熱が高まり、宗教団体による布教活動の活発化や、異なる宗教間の不和が生じるケースも見られるようになる。政府は、「宗教知識科」の導入とシンガポール社会における宗教熱の高まりの因果関係を公式には認めなかったものの、当時の教育大臣などは、その両者に因果関係があるという認識のもとで、同科目の見直しを図った⁴。結果として、シンガポール政府は、宗教教育が家庭などの私的空間において行われるべきものとし、「宗教知識科」は廃止されるに至る。

シンガポールは、とりわけ人種と宗教との結び付きが強いマレー系が人口の約13%を占めることから⁵、宗教間の軋轢が人種間の軋轢に波及する危険性をはらんでいる。シンガポール政府は、1990年代に入ると、改めて宗教的調和の必要性を主張し始めた。シンガポールは多人種国家であることに加えて多宗教国家であり、信仰の割合を見ても多数を占める宗教が存在しない（図1参照）。政府は、そのような環境下で異なる宗教間での衝突があれば、問題の大小を問わず積極的に介入していく姿勢を貫き、現在に至っても宗教的調和の維持を促している。

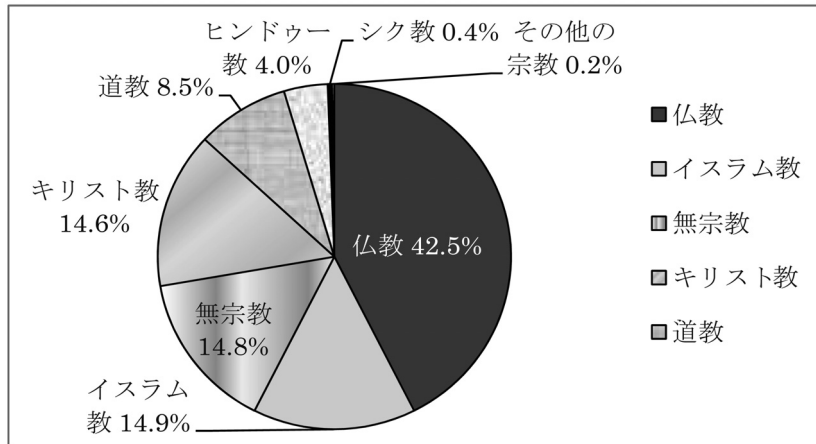


図1 シンガポールにおける信仰宗教の割合

出典) Leow Bee Geok, *Census of Population 2000: Education, Language and Religion*, Singapore Department of Statistics, 2000, p.110. をもとに作成

1991年、シンガポール人のアイデンティティの発展・定着を目的として、「国民共有価値」(Shared Value)が導入された。すべてのシンガポール人が共有すべき価値として提示されたこの「国民共有価値」は、同国のすべての人種が受け入れることのできる抽象的な価値が望ましいとされ⁶、以下の五つに集約された⁷。

- コミュニティの前に国家、個人よりも社会 (Nation before community and society above self)
- 社会の基本単位としての家族 (Family as the basic unit of society)
- 個人への尊重とコミュニティによる支援 (Regard and community support for the individual)
- 闘争よりもコンセンサス (Consensus instead of contention)
- 人種的・宗教的な調和 (Racial and religious harmony)

「国民共有価値」の導入に先立って発行された『国民共有価値』(1991)と題する白書では、共有価値の最初に掲げられる「コミュニティの前に国家」の原理が、「人種的・宗教的寛容性および調和の価値を支える」ものであり、それ故に最も重要な価値として位置づけられている⁸。また、「シンガポールの文化的バラスト (cultural ballast) の主要部分は、市民の宗教的信仰」⁹としながらも、シンガポール人には無宗教者も少なからず存在し、そのような人々に対して政府が中立であるためには「国民共有価値」が「いかなる宗教的価値をも含まない世俗的な文書でなければならない」¹⁰ことが明示された。1991年に新たな道徳科目として導入された「市民・道徳教育」(Civic and Moral Education, CME)は、「国民共有価値」の価値項目を基盤に構築されている。

3. 「市民・道徳教育」のシラバスにおける宗教的調和

(1) 「市民・道徳教育」の6つのコア・バリュー

「市民・道徳教育」は、試験対象外の必修科目であり、2007年に教育省（Ministry of Education, MOE）が公表した同科目のシラバス¹¹では、「敬意」（Respect）、「責任」（Responsibility）、「高潔」（Integrity）清廉、「気遣い」（Care）、「奮励」（Resilience）、「調和」（Harmony）という6つの核となる価値観が設定されている。中でも、「調和」（Harmony）の価値観において人種や宗教のトピックが中心的に取り扱われていることから、ここでは「調和」の価値観に主眼を置いていくこととする。

この「調和」を意味する「Harmony」は、そのスペルである「H」・「A」・「R」・「M」・「O」・「N」・「Y」に下記の意味が付与されている。

H = Hearing my neighbor. (隣人に耳を傾けること)

A = Allowing him to be who he is. (その人がその人であることを認めること)

R = Respecting him. (人に敬意を払うこと)

M = Making time to understand his ways. (人の進路を理解するために時間をかける)

O = Opening my mind to our differences. (我々の差異に対して心を開く)

N = Never offending him. (人を決して不快にさせない)

Y = Yearning to be a person of peace. (平和な人になることを望む)

ここでは、文化間や人種間などにおける調和は強調されておらず、むしろ、そういったバックグラウンドへの配慮の前に、他者、換言すれば人間そのものに対する敬意や理解の姿勢が強調されていることが分かる。「市民・道徳教育」のシラバスにおいてはコア・バリューの「調和」で扱われるトピックやコンセプト、それらを扱う狙いなどが示されている（図2参照）。宗教に関するトピックは主として、中等3～4学年の「コミュニティにおける調和」というテーマの中で取り扱われる。

「コミュニティにおける調和」では、コミュニティの調和を維持することの利益を正しく理解すること、そしてコミュニティの調和を促す方法を明確化することが目指される。そこでは、①コミュニティの調和を維持することがなぜ重要であるのか、②調和的なコミュニティとは何であるのか、③どのようにしてコミュニティの調和を促すことが出来るのかなどの問いかけが行われる。そして、これらの問いかけに対応する形で、①コミュニティにおける調和は、国家の安定と発展に欠かせない国家的結束を促す、②異なる人種・宗教の人々の間での相互の理解と正しい認識があるコミュニティを指す、③我々の社会における文化的多様性を正しく認識し、それぞれのエスニック・グループがシンガポール社会に多様な貢献をしていることを理解する、という回答が用意されており、これらの回答に行き着くよう生徒を導いていくことが求められる。

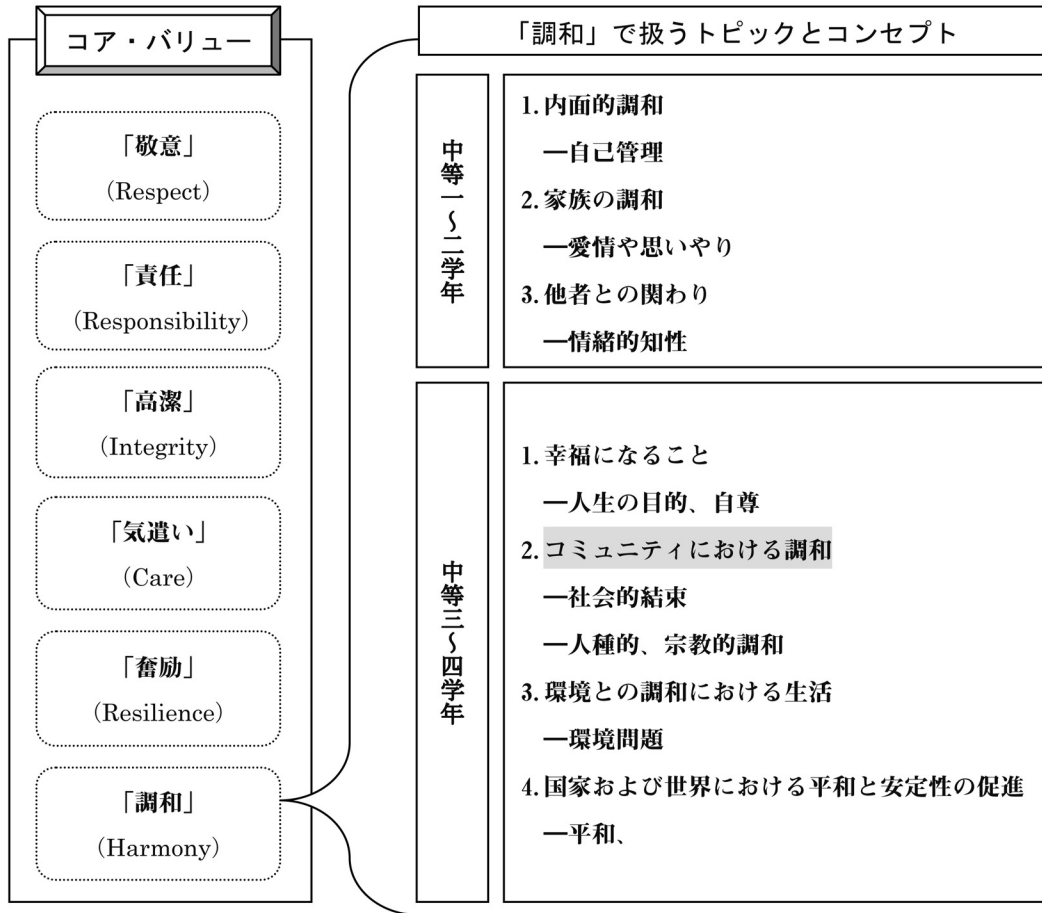


図2 「市民・道徳教育」の「調和」において扱われるトピックとコンセプトの概要
 出典) Ministry of Education, Curriculum Planning and Development Division, *Civics and Moral Education Syllabus: Secondary 2007*, 2006. をもとに作成

4. 学校現場における宗教的寛容性の育成

(1) 調査の対象校

CME のシラバスが求める内容が具体的に学校現場においてどのように教えられているのかを明らかにするために、2010年5月6日から5月12日にかけて現地での調査を行った。訪問した学校は政府立学校 (government schools) が2校、政府補助学校 (government-aided school) が1校である。そのうち、1校の政府立学校は、インタビュー内で取り扱う内容が宗教という非常にセンシティブでデリケートなトピックであるということから、このインタビュー内容を研究で使用する場合には、学校名を伏せるよう要望があったため、ここではA校と表記する。ほか2校は、政府立学校がウッドグルーブ中等学校 (Woodgroove Secondary School, WSS) 政府補助学校がセント・ジョーゼフ・インスティテューション (St Joseph's Institution, SJI) である。調査対象校選定に

おいては、他にもいくつか調査依頼を試みたが、これら3校のみが宗教的寛容性の育成というテーマに理解を示し、協力して下さったという背景がある。ただし、SJIについては、独自に「宗教・道徳教育」(Religious and Moral Education, RME) という科目を設けていたことにかねてから着目していた。シンガポールにおける政府補助学校は、そのほとんどがミッションスクールなどの宗教系の学校だが、それらの学校のカリキュラムをウェブサイト上で調べた際、宗教と道徳教育の関連性を強調する学校が少なく、宗教と道徳教育を意識的に関連付けているSJIにおいて調査が出来たことは非常に貴重だったといえる。

調査は3校すべてにおいて以下の内容で行った。

①CME およびRME (SJIのみ)の担当教員へのインタビュー

・・・CME およびRMEの授業内での宗教的寛容性の育成に関わる取組みの考案や実践、その評価について

②学校長へのインタビュー

・・・学校全体の取組みとしての道徳教育における宗教的寛容性の育成について

③CME およびRMEの授業参観

A校：3年生1学級

WSS：4年生1学級

SJI：3年生1学級

ただし、②および③で得られた情報に関して、本稿ではあくまでも補足的な情報として取り扱うこととする。というのも、②に関しては、いずれの学校においても、学校全体の道徳教育において宗教的寛容性をメインテーマとして扱っておらず、従って、そのテーマのために学校全体の道徳教育が組まれていない。いずれの校長も、宗教的寛容性についてはシンガポール社会において重要なテーマであるとの見解を示しており、学校教育においても不可避のトピックとして認識しているが、学校全体で取り扱うにはあまりにデリケートな問題として慎重な姿勢を見せていた。そのため、学校全体の道徳教育として宗教的寛容性をどのように育成しているのかについて明らかにすることは困難といえる。

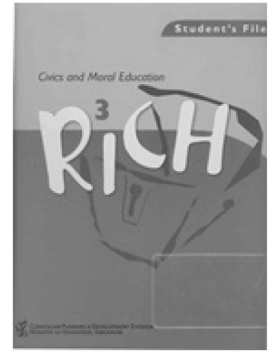
③については、それぞれの学校につき、参観が1つの学年の1学級のみを対象としていたため、その事例のみを当該学校のCMEの特徴的な取組みとして捉えることは難しい。また、A校に関しては、ちょうど宗教ではなく人種の問題を扱う時期であったため、宗教のテーマを扱った授業を参観することが叶わなかった。そのため、授業参観で得られた情報について、本稿では参考程度に留めるべきといえる。

以上のことから、本稿においては、①で得られた情報ならびに、CME およびRME 担当教員から提供して頂いた資料を主な分析対象とする。

(2) 政府立学校の事例 『R³ICH』(中等3学年)

WSS およびA校では、宗教的寛容性の育成に関して、共通して「市民・道徳教育」の教材である『R³ICH』が使用され、その内容に準拠して授業を展開していた。そのため、まずは『R³ICH』の内容を概観する。ここでは、宗教に関するトピックを最も多く取り扱っている中等3学年の『R³ICH』を見ていく¹²。

『R³ICH』には、教員用ファイルと生徒用ファイルがあり、教員用ファイルにおいて、宗教的寛容性の育成がどのように目指されているのか、それが学校現場でどのように行われるべきとされているのかについて見ていく。この『R³ICH』は、「市民・道徳教育」のコア・バリューである「Respect」, 「Responsibility」, 「Resilience」の頭文字を「R3」とし、「Integrity」, 「Care」, 「Harmony」の頭文字を合わせて「R³ICH」となっている。このテキストの内容は「市民・道徳教育」のシラバスに準拠していることから、ここでも、宗教についてのトピックを扱っている「調和」(Harmony)の部分を見ていくこととする。



(3) 宗教のトピックに関わる取り組み

「調和」は、シンガポール社会における多文化的遺産を正しく認識することを目指している。そのため、異なる文化と宗教がシンガポール社会における豊かな多様性に寄与していること、そして、国民が人種かつ宗教的調和を重んじ、他者に敬意を払っているからこそ、この多様性を享受することができるという認識を生徒に持たせることが求められている。そして、「他者との相互関与において敏感になることが、他者に敬意を表することの価値を強化し、異なる人種や宗教のバックグラウンド持つ人々との良い関係を育」み、シンガポールにおける異なる信仰体系の教えと実践の学習を通して、これらの宗教のすべてが、①他者への敬意、②すべての生命に対する愛、配慮、気遣い、③正しい振る舞いと道徳的な実直さという基礎的な価値を教えていることを学ぶことを理解する。そして、他者との相互作用において望ましい姿勢と振る舞いを実践できるようになることが望まれる。

これらのことを実際にどのように促すのかについては、「R³ICH」において明示されている。第一週目は、生徒をグループに分け、なぜ人種的調和が重要であるのかについてディスカッションを行うために、次のような問題を提起する。

- ・ シンガポールにおいて人種的・宗教的寛容性に関わる紛争が起こらないようにするためには、国民がどのように協力し合えばよいのか？
- ・ 人種的・宗教的調和は、自分たちにとって何を意味するか？
- ・ 異なる人種的・宗教的背景を持つ他者との相互関係において、我々がとるべき望ましい姿勢や振る舞いとは何か？

これらの問題をディスカッションすることにより、すべての宗教を敬うことの重要性和、自身らが享受している人種的・宗教的調和が当たり前のものではないことを認識させる。

第二週目は、各生徒が自分の信仰している宗教以外の宗教に関して30秒間のスピーチをさせる。その際、スピーチの準備のために10分の時間を与え、一人ずつグループ内でスピーチを行う。聞いている他のメンバーはその生徒のスピーチが的確であるかを評価し、間違った事実があれば、それを指摘したり中断したりするためにブザーを使用することができる。この取り組みによって、生徒に寛容の精神の基本とは、他の宗教の信条や実践を理解することであると認識することの重要性に気付かせることが求められる。その際に、以下のような問いを用いることが望ましいとされている。

- ・ この活動でそれぞれの他の宗教の知識について何が浮き彫りになったか
- ・ それぞれの宗教について知ることがなぜ重要なのか
- ・ あなたが共に生活している人々の宗教的信条や実践について十分に知らないことがどのような結果をもたらすのか

最後に、来週への準備として、各グループにテーマのリストから一つのトピックを割り当て、それについて、仏教、キリスト教、ヒンドゥー教、イスラム教、シク教そして道教のすべての宗教と関連させる形でリサーチをさせる。リスト上のテーマは、①神あるいは神性、②人生の目的、③他者とのかわり、④食べ物と食事制限、⑤礼拝と祈りの時間、⑥儀式、礼拝の場における物理的な配置や適切なエチケット、⑦服装、宗教的指導者あるいは宗教の創始者、の7点が提示されている。そして、第3・4週目は、生徒たちに各グループごとにリサーチの結果を発表させることとなっている。

これらの『R³ICH』をもとにした授業の進行は、A校およびWSSの両者において見られたが、A校においては、生徒がスピーチやグループでのリサーチ結果の発表などにおいて、自身が信仰していない他の宗教について述べる時に誤った情報が提供されることを危惧し、担当教員たちがそれぞれの宗教の詳細についてまとめた資料を独自に作成していた。教員が最も危惧しているのは、生徒により誤った情報が提供されることそれ自体ではなく、そのことに教員が気付けないことであり、従って、各宗教の予備知識を十分に身に付けておく必要性を感じていた。それは、いずれの学級においても、CMEで扱われるシク教以外の宗教を、いずれかの生徒が信仰している場合が多いためである。更に言えば、キリスト教を信仰していない教員がCMEの授業を担当している場合、その教員よりもキリスト教を信仰している生徒の方がキリスト教について詳しいということも十分あり得る。そのため、CMEにおいて宗教を扱う上で、教員は独自に各宗教に関する学習を入念に行う必要がある。

(4) 取り組みの評価

CMEにおける宗教を扱った活動の評価に関しては、グループごとのディスカッションにおいて

提起された問題の答えやプレゼンテーションの内容を判定する下記のようなチェック項目が設けられている。ここでチェックされた内容は、CMEの科目全体の評価に加味されることとなる。

1. すべての質問に答えているか
2. 答えは的確か
3. 情報の出典を明らかにしているか
4. 答えに行きつくまでに一つ以上の情報源が使われたか
5. 答えは関連する項目とともによく説明されたか
6. そのグループのすべてのメンバーが平等に貢献したか
7. 全体として、プレゼンテーションは明確であり、我々がよりよく宗教を理解することを助けるものであったか
8. プレゼンテーションは、主な宗教、すなわち仏教、キリスト教、ヒンドゥー教、イスラム教、シク教そして道教のすべてを盛り込んでいたか

A校およびWSSの両校とも、上記のチェック項目の他に独自のループリックを設けている。このループリックについては、両校ともに提供して頂けたが、実物の公開の承諾は得られなかったため、許される範囲で大まかに評価の視点のみ説明したい。

両校とも共通していたのは、他の宗教への「寛容」の姿勢についての視点が見受けられた。それは、理解度を測るというものではなく、理解しようと努める姿勢、つまり寛容の姿勢を示しているか否かが問題となる。また、A校については、すべての生徒にCMEで取組んだ宗教に関するトピックから、何を学んだかについてのレポートを提出させている。このレポートは、生徒の率直な意見を求めていることから、感想文のような位置づけとなっている。

いずれにしても、評価に関しては、『R³ICH』において提示されているチェック項目の他に、独自の評価基準を設け、生徒の宗教的寛容性がどの程度養われたのかを判断している。

(5) 政府補助学校の事例 St Joseph's Institution

政府補助学校セント・ジョーゼフ・インスティテューション(St Joseph's Institution, SJI)は、キリスト教系の政府補助学校であり、ラ・サール系列の男子校として知られている¹³。同校に設けられている「宗教・道徳教育」(Religious and Moral Education, RME)の科目は、基本的な方針においてはCMEに準拠しながらも、それとは異なるフレームワークを構築している。ただし、これらのフレームワークは、ラ・サール・ファミリーで作られたものであることから、SJIが独自に構築したものではない。表1に示すように、SJIにおけるRMEは5つのテーマを持ち、そのうちの「世界の宗教」のテーマにおいて、生徒たちに異なる宗教への理解を促す取り組みを行っている。

「世界の宗教」のテーマにおいて、同校は、1年生では「多様な宗教の象徴」、2年生に「宗教的祝典と祭典」、3年生でシンガポールにおける「主要な信仰の伝統に見られる顕著な宗教的特徴」、

4年生で「主な信仰の伝統的な書物と教示」を取り扱う。ここで取り扱われる宗教は、CMEの教材に示されている仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、シク教、道教である。いずれの学年においても、生徒は生徒同士のディスカッションや教員との対話によってこれらのテーマを学ぶことが推奨されている。

また、3年生になると、すべての生徒が実際に宗教に関連する場所を訪問する機会が与えられる。とりわけ、SJIはキリスト教系の学校であるため、イスラム教のモスクや仏教の寺院などでの現地学習を行うことで、他宗教に対する寛容の精神を養う工夫がなされている。

SJIのRMEの一環において、3年生になるとプロジェクト・スクビリオン(Project Scubilion)に参加することが義務付けられる。プロジェクト・スクビリオンは、RMEにおいて取り扱った事柄を実際の経験として学ぶためのプロジェクトである。このプロジェクトは、「貧困者と年配者」、「身体障害者」、「差別」、「功労者」という四つのテーマから成り、それぞれのテーマごとに関連する施設等で活動することが求められる。例えば、RMEの「社会的公正」のテーマでは、1年生から3年生にかけて高齢者や貧困、身体障害者、そしてエイズの問題について学ぶが、プロジェクト・スクビリオンにおいては、老人の介護施設、障害児センター、エイズ慈善組織などに訪問し、ボランティア活動に従事することになる。そこでは、授業で知識的あるいは観念的に学んだことを経験的に理解するだけでなく、授業で取り扱った問題にどのように取り組んでいくべきかという問いに対する答えを実際の行動で体現していくことが求められる。そのため、プロジェクト・スクビリオンはRMEで学んだことを具現化する機会を提供するものとして、同科目において非常に重要な位置を占める。

表1 St Joseph's Institution における「宗教・道徳教育」のフレームワーク

学年	個人的道徳&自己	コミュニティ	世界の宗教	社会的公正	祈禱/省察
1	〔選択〕 精神生活の3段階	聖ヨハネ・バプティスタの業績 ラサリアンの価値	多様な宗教の象徴	高齢者、貧困者	省察の方法 祈禱とは何か
2	〔選択〕 ニーズ&価値	世界のラサリアン・ コミュニティの活動	宗教的祝典と祭典 通過儀礼	身体障害者 人種差別	省察の方法 祈禱とは何か
3	決断のためのリス スン・モデル	家族の力学と緊張 関係	主要な信仰の伝統 に見られる顕著な 宗教的特徴	エイズの差別	省察の方法 祈禱とは何か
4	決断のためのリス スン・モデル		主な信仰の伝統的 な書物と教示	人権、薬物、 アルコールの乱用	

出典) St Joseph's Institution ウェブサイト : <http://www.sji.moe.edu.sg/subpage.php?id=167>
(2010年9月28日アクセス確認済)

しかし、プロジェクト・スクビリオンのテーマにおいて宗教が含まれていない点に留意する必要がある。宗教に関する事柄の具現化は、宗教的実践を避けることが出来ないことから、プロジェクト・スクビリオンにおいては宗教的な要素を遠ざける結果となっている。

5. おわりに

シンガポールの中高等学校において宗教的寛容性の育成がどのように行われているのを見てきた。そこから浮かび上がる特徴として、第一に、生徒の主体的な学びが奨励されていることがあげられる。政府立学校および政府補助学校の両者において、生徒が主体となって宗教に関するディスカッションや対話、リサーチなどを行い、宗教について学ぶことが求められていた。第二に、宗教的寛容の精神が異なる宗教への理解によって養われるという理念から、生徒に自身が信仰していない宗教に触れたり、言及する機会が与えられていた。政府立学校においては、その教材の中身に沿って、生徒に自身が信仰していない宗教に関するスピーチを行う機会が与えられ、政府補助学校のSJIにおいては、生徒に自身の宗教とは異なる宗教的施設に訪問見学させる機会を設けるなどの工夫がなされていた。第三に、宗教的寛容の精神を身に付ける際に、宗教的不寛容がいかなる結果をもたらすのかを想像させることが重要とされていることが分かった。これは、宗教的寛容がなぜ必要とされるのかという根本的な問いを生徒自身に考えさせ、その必要性に気付かせることが目指されている。これらのことから、シンガポールにおける宗教的寛容の精神は、異なる宗教に対する理解を深めること、そして宗教的不寛容の危険性を認識することにより養われるものとして捉えられているといえることができる。本稿では、CMEの科目に焦点を当てたが、現在、シンガポールにおける道德教育は様々なプログラムが相互に関与し合う形で発展を遂げている。中でも国民教育(National Education)は、重要なテーマの一つとして人種的・宗教的調和を掲げており、CMEの科目と関連付けてその取り組みに注視する必要がある。その点については、今後の課題として提示する。

注

- 1 平中里弥「シンガポール中等教育における『宗教知識科』導入の論理 その正当性と宗教的中立性をめぐる議論に着目して」、『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第57集・第2号、2009、349-351頁
- 2 *Parliamentary Debates Singapore*, Volume 41, No. 11, 1982, p. 1084.
- 3 インタビュー調査は2010年5月6日から5月30日にかけて、「キリスト教知識」の元担当教員2名と同コースを選択していた生徒2名、「仏教学習」の元担当教員2名および同コースを選択していた生徒1名、「儒教倫理」の元担当教員1名および同コースを選択していた生徒1名を対象に実施。
- 4 *Parliamentary Debates Singapore*, Volume 53, No. 7, 20th March, 1989, p. 512
- 5 Singapore Department of Statistics, *Census of Population 2010*, 2010, p. 13. より算出。
- 6 *Parliamentary Debates Singapore*, Volume 52, No. 6, 1989, p. 442
- 7 *Shared Values*, Singapore, 1991, p.10.

シンガポールにおける宗教的寛容性の育成

- 8 *Ibid.*, p. 5.
- 9 *Ibid.*, p. 8.
- 10 *Ibid.*, p. 9.
- 11 Curriculum Planning and Development Division, *Civics and Moral Education Syllabus – Secondary 2007*, Ministry of Education, 2006.
- 12 以下、『R³ICH』についてはCurriculum Planning and Development Division, *R³ICH*, Secondary Three, Ministry of Education, 2008を参考とし、その詳しい取組み内容については、A中等学校およびウッドグループ中等学校から頂いた資料ならびにインタビューの内容を参考として説明する。
- 13 以下、SJIの道德教育について、調査の際に頂いた資料ならびにインタビュー内容をもとに説明する。インタビュー調査は、SJIの校長ならびに、「宗教・道德教育」の担当教員に行った。

参考文献

- 1 . Curriculum Planning and Development Division, *Civics and Moral Education Syllabus – Secondary 2007*, Ministry of Education
- 2 . Curriculum Planning and Development Division, *R³ICH*, Secondary Three, Ministry of Education, 2008
- 3 . Michael Hill and Lian Kwen Fee, *The Politics of Nation Building and Citizenship in Singapore*, Routledge, 1995.
- 4 . *Parliamentary Debates* Singapore, Singapore
- 5 . Robert W. Hefner ed., *The Politics of Multiculturalism: Pluralism and Citizenship in Malaysia, Singapore, and Indonesia*, University of Hawai'i Press, 2001.
- 6 . S. Gopinathan, Moral Education in a Plural Society: A Singapore Case Study, *International Review of Education*, Vol. 26, No., 2, 1980, pp.171-185
- 7 . *Shared Values*, Singapore, 1991
- 8 . Singapore Department of Statistics, *Census of Population 2010*, 2010
- 9 . Tan Tai Wei, Moral Education in Singapore: a critical appraisal, *Journal of Moral Education*, Vol. 23, No. 1, 1994.
- 10 . Tan Tai Wei and Chew Lee Chin, Moral and Citizenship Education as Statecraft in Singapore: a Curriculum Critique, *Journal of Moral Education*, Vol, 33, No. 4, 2004.
- 11 . Tham Seong Chee, *Religion and Modernization: a Study of Changing Rituals among Singapore's Chinese, Malays, and Indians*, Unesco, 1984
- 12 . 平中里弥「シンガポール中等教育における『宗教知識科』導入の論理 その正当性と宗教的中立性をめぐる議論に着目して」、『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第57集・第2号、2009、343-358頁

参考ウェブサイト

- 1 . Ministry of Education : <http://www.moe.gov.sg/>
- 2 . St Joseph's Institution : <http://www.sji.moe.edu.sg/subpage.php?id=1>

Cultivation of Religious Tolerance in Singapore — Civics and Moral Education in Secondary School —

Satomi KANAI

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

This study explored how secondary schools cultivate pupils' religious tolerance in Civics and Moral Education (CME) classes in Singapore. Singapore government has been emphasizing religious and racial harmony since a failure of Religious Knowledge in 1980s. In 1991, CME was introduced in secondary schools and it has been needed that pupils recognize the importance of religious harmony and tolerance. This study explored how secondary schools cultivate pupils' religious tolerance by analyzing the syllabus of CME and field work in Singapore and found three features: first, independent learning of pupils was encouraged and made much of discussion and research on various religion, second, pupils were given opportunities of concerning with different religion, third, it is promoted that pupils recognize the risk of religious intolerance in multi-religious society.

Keywords : " Civics and Moral Education " , Moral Education, Religious Tolerance, Religious Harmony, Understanding of Religion

